



TITLE:

ミルの社會學概念

AUTHOR(S):

米田, 庄太郎

CITATION:

米田, 庄太郎. ミルの社會學概念. 經濟論叢 1927, 24(3): 470-495

ISSUE DATE:

1927-03-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/128520>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號 三 第

卷四十二第

行發日一月三年二和昭

論 叢

廣告稅論

教授 法學博士

神戶 正雄

ミルの社會學概念

講師 文學博士

米田 庄太郎

露西亞の新經濟政策と農業

教授 法學博士

河田 嗣郎

土佐の百姓一揆

教授 經濟學士

黑 正 巖

時 論

支那問題管見

教授 法學博士

末廣 重雄

說 苑

ブルゲン氏の諸社會主義評論

教授 法學博士

田 島 錦治

琉球の慶長役以後

教授 法學博士

山本美越乃

雜 錄

日銀指數利用の一指標

講師 經濟學士

蜷 川 虎三

伊太利のリラ貨引上策について

經濟學士

松岡 孝兒

長週期景氣循環に關する一研究

經濟學士

菊田 太郎

梅雨考

教授 法學博士

財部 靜治

ミルの社會學概念

米田庄太郎

一 緒 言

ゴムバールトは、數年前マックス・ウェバー紀念出版物として、公にされた「社會學の主要諸問題」に寄稿せる一論文「社會學の始源」に於て、「人間の諸關係及び文化諸現象の總體を、經驗的因果的に説明することを任務とする一の經驗科學」としての近世社會學の始源を、第十七世紀の終り頃及び第十八世紀間に於ける英國の諸學者の所説に求め、其等の學者の興味ある説を紹介して居る。併し余は自然科學的社會學の始源は、更に夫れよりも遙かに以前の時代に於て見出し得られると信じて居るので、二十數年前京都帝國大學文學部に於て、社會學史を講述せし際にも、希臘のソフィストの思想から研究し始めたのである。されど吾人は自然科學的社會學の實質的始源の探究と、一の獨立なる科學としての自然科學的社會學の概念の始源の探究とを、よく區別して考へねばならぬ。何れの科學にありても、其の主要問題として取扱はれるもの、實質的研究は、

其の科學が一の獨立なる科學として學問論的に規定される以前に、既に他の諸科學に於て取扱はれて居ることは、普通に見る處の一事態であるが、此の事態は社會學の如く一般的社會科學として、諸般の社會現象を一般的に研究せんとするものに於て、殊に著しく注目されるのである。されば社會學の實質的起源を探究せんとするに當つては、餘程以前の時代に遡りて諸般の社會科學の歴史に就て、探究せねばならないのは當然である。併し一の獨立なる科學として自然科學的社會學の概念を、學問論的に規定せんとする企ては、大體上第十九世紀の前半期間に於て始めて現はれたるものである。かくてゾムバールの探求した第十七世紀及び第十八世紀の英國學者の所說中には、現今の自然科學的社會學者の諸說の根本思想が、既に甚だ明亮に論述されて居ることを見るが、併し其等の學者の何れもまだ社會學の概念を學問論的に論述して居ない。そうして余の知る處では、ジョン・スチュアート・ミルの社會學論は、英米に於て始めて社會學の概念を學問論的組織的に論述したるものである。かくてミルの社會學論は、英米に於ける社會學論の發達上、甚だ重要な意義を有するものである。

尙ほミルの社會學論は、實に社會學概念の發達上重要な意義を有するのみならず、更に英米に於ける諸般の社會科學の概念、殊に經濟學の概念の發達に於ても亦、重要な意義を有する。ミルは其の「經濟學の原理」に於て、アダム・スミスの例に倣ひ、經濟學の原理を抽象的に論述せ

す、當時の實際問題に結び附けて論述し、更に經濟學を出來るだけ他の社會諸科學に結び附けて論述して居る。そうして夫れが彼の「經濟學の原理」が汎く諸方面の人々に讀まれ、著書として大成功を收めたる重要な一理由と認められて居るのであるが、併し詳しく吟味して見ると、彼は單に經濟學を他の諸般の社會科學と結び附けて論述して居ると云ふだけでなく、其の論述の根柢には一切の社會科學の關係に就て、學問論上重要な思想を含ませて居ることが發見される。夫れは經濟學を始め諸般の特殊的社會科學の根柢に、一般的社會科學としての社會學を据え附け、之れに依りて一切の特殊的社會科學を組織的に結合せんとする思想である。そうして夫れはつまり先づ一般的社會科學としての社會學の概念を確立し、經濟學を始め諸般の特殊的社會科學の概念を之れに結び附けて、且つ相互の關係に於て考察することによりて、學問論的に規定せんとするものである。然るに學問論的に嚴密に考ふれば、經濟學を始め一切の社會科學の概念は、右の方法によりて始めて正當に規定されるものであるから、ミルの見解は經濟學の概念を學問論的に正當に規定する方針を、英米の經濟學史上始めて明白に指示したるものとして、重要な意義を有するものと思はれるのである。

併しミルの社會學論は、上に述べしが如き意味にて、歴史的に重要な意義を有するだけに止まるものでなく、今日の社會學論に於ても甚だ重要な意義を有つて居るのである。是れ彼の社

會學論は英米に於ける自然科学的社會學概念の基礎を据え附けたるものにして、今日の社會學者間にありても、社會學を自然科学的一科學と見る人々は、其の用ゆる術語や又其の論述の仕方に於てはミルと異なつて居ても、根本的にはミルの思想を祖述し、或は展開して居るものと、見做し得られるからである。さればミルの社會學論の批判的考察は、單に社會學史上の一問題の研究として意味を有するだけのものでなく、今日の社會學論の研究としても重大なる意味を有するものである。それで余は本論文に於てミルの社會學論を批判的に考察することによりて、其の歴史の意味を究明すると同時に又、今日の自然科学的社會學概念の根柢を評價せんとするのである。

尙は余はミルの社會學論に於て、余の社會學論の上から見て殊に興味を感じる二三の點がある。其の一はミルは心理學を以て社會學の基礎と認めながら、しかも普通の心理學を直ちに社會學の基礎となし得ないことを覺つて、新たに性格學 (ethology) なるものを建設する必要を説いて居ることである。もつともミルの立場からは、彼が性格學と稱するが如きものを建設することは甚だ困難である、或は不可能であるとも云ひ得られる。されば彼は遂にはかゝる科學を建設せんとする企圖を放棄したのである。しかも彼が社會學の基礎として、直ちに傳來の心理學を使用し得ないことを覺つて、其の上に一の新しき心理學を建設する必要を認めたと云ふことは、余の社會學論上から見て甚だ興味ある事實である。それで余は本論文に於て、ミルは彼の立場からし

ては、何故に彼の性格學と稱するが如きものを建設し得なかつたかを究明すると同時に、夫れは如何なる科學として考へらる可きものであるか、又夫れは如何にして建設さる可きものであるか、そうして夫れは結局社會學と如何なる關係に立つ可きものであるかを論究して、今日の社會學の最も根本的な一問題、即ち社會學と社會心理學との關係に就て、愚見の一般を示したいと思ふ。

次にミルの社會學論に於て余が特に興味を感ずるは、社會法則の性質に關する彼の論述中に含まれて居る一思想である。此の思想に就ては後に特に稍々詳しく説述するが、要するにミルは、社會法則は實質的には結局必然性を意味するものでも、亦蓋然性を意味するものでもなく、つまり可能性 (possibility, Möglichkeit) を意味するものと解して居たのではないかと思はれるのである。但しミルは理論的に完全なる社會法則は、普遍的因果必然性を表示するものにして、そうして蓋然性や可能性を表示するものは下位の法則即ち經驗的法則であるか、又は經驗的法則の價值さにも有しないものと考へて居たが、しかも彼は普遍的因果必然性を表示する社會法則を發見するは、實際上甚だ困難にして、實際上發見されて居るもの、又發見し得られるものは、一般に蓋然性が可能性かを表示するものであると考へたのである。さればミルの此の考へを論理的に推しつめて行くと、社會學は一の自然科學的科學であるとして學問論的に規定されても、夫れが眞實に

自然科學的科學として實質的に建設されることは甚だ困難であること、或は殆んど不可能であることとなる。要するに自然學科學的科學としては社會學は、到底眞實なる科學として成立し得ないことになるのである。かくて社會學を社會哲學から區別して、一の科學として建設し得る爲めには、自然科學の外に之れに對立する新しき科學部類を認めねばならないが、然らば如何なる新しき科學部類を認む可きか、是れ近來殊に獨逸に於て盛んに論究されて來た問題にして、余も亦近頃大に力を注いで居るものである。そうして余は現實態或は經驗或は事實或は現象の因果的聯結の必然性を究明することを自然科學の本質と見るに對して、現實態或は經驗或は事實或は現象の志向的聯結の可能性を究明することを本質とする文化科學なる新しき科學部類を設定したいと思ふ。但し此の場合に云ふ自然科學及び文化科學とは、科學の對象の上から立てたる科學の區別を意味するのでなく、其の方法の上から立てたる科學の區別を意味するのである。そうして余は文化科學を個性化的或は歴史科學的文化科學と普遍的文化的文化科學とを區別し、社會學を以て普遍的文化的文化科學に屬する一科學と見るのである。但し此等の問題に就ては、後に稍々詳しく論ずることとする。

余は社會學に就て右に述べしが如き見解を抱くに至つてから、ミルが早くより實際上一般に發見されて居る或は發見し得られる社會法則は、主として蓋然性が可能性かを表示するものである

と見て居たことに、深く興味を感ずるに至つたのである。云ふまでもなくミルは蓋然性と云ふことも亦可能性と云ふことも、共に因果關係の上から解したので、かくて之を表示する社會法則は、普遍的必然性を表示する社會法則に劣るものと考へたのである。併し上に述べし如く可能性を因果關係或は因果的聯結に即して解せず、志向關係或は志向的聯結に即して解すると、夫れは低度の必然性を意味するものでなくして、必然性とは異なる獨立の意味を有するものであることが覺られるのである。要するに可能性と必然性とは、相對立する聯結の二形式であつて、兩者の間に優劣の差は本來存しない。かくて科學は根本的に、因果的聯結の必然性を究明せんとするものと、志向的關係の可能性を究明せんとするものの二部類に、大別さる可きものとなるのである。

ミルはまだ此の理を了解しなかつた。又彼の認識論の立場からは、之を了解することは到底不可能であつた。しかも彼は實際上の社會法則は主として蓋然性か可能性かを表示するものと認めて居たのであるから、彼れ以後の英米社會學者にして、若し特に此の點に注目して思考を練る人があつたならば、彼の社會學の概念を根本的に改造せんとする企だが、早くから現はれて居たかも知れない。さはれ又夫れが爲めには最近獨逸で發達して來た様な認識論が必要であることを思ふと、今日に至るも尙ほ英米の社會學者中ミルの社會學の概念を根本的に改造せんと企だてたものがなく、彼等が一般に其の根本的思想を其の儘に傳承して居るのは、敢て怪むに足らない。

さて余は以上述べ來りしが如き主旨で、此處にミルの社會學論を論究せんとするのであるが、本雜誌掲載上の都合により、本論文を左の三論文に分つこととする。

(一) ミルの社會學概念

(二) ミルの經濟學概念及び性格學概念

(三) ミルの社會學論の批判

そうして本號に於ては先づ「ミルの社會學概念」を論究する。

二 ミルの社會學概念

ミルの社會學概念の根本思想は、千八百四十四年に發表されたが、併し彼が既に千八百三十一年に書き上げられて居たと云ふ「經濟學に於ける未決問題に關する數論文」(Essays on Unsettled Questions in Political Economy) 中の一論文、「經濟學の定義、並に經濟學の本質に適合する研究の方法に就て」(On the Definition of Political Economy; and on the Method of Investigation proper to it) の中に説述されて居るが、併し夫れは彼がまだ論理學の研究を大成しない前に書いたものであるから、甚だ粗雑である。そうして彼が千八百四十三年に公にせる「論理學體系」(A System of Logic) の第六篇「精神科學の論理學に就て」(Book VI. On the Logic of the Moral

Sciences) の中に、彼の大成せる社會學の概念が、始めて組織的に論述されて居るのである。(岐阜農林學校教授鈴木文學士は、右に挙げし論文と論理學體系第六篇とを翻譯し、て一冊の書物となし、刀江書院より近々に出版されることとなつて居る。)

それでは余は此處に論理學體系第六篇によりて、ミルの社會學概念の一般を述べることにする。

夫れ社會の一切の現象は、外部的諸事情が人間の團體の上に及ぼす作用によりて、產出される人性の現象である。されば人間の思想、感情及び行動の現象は、恒定不變な法則に従ふものであるとすれば、其の當然な結果として、社會の現象も亦恒定不變な法則に従ふものと認められねばならぬ。云ふまでもなく社會現象の法則は、假令天文學の法則の如く確實に又完全に認識されたとしても、尙ほ天文學の法則が數千年後に於ける天體の出現を豫見させる如くに、社會の歴史を豫見させることは出来まい。併し此の確實性の差異は、其等の法則其物に存するのでなく、其等の法則が適用する可き與料に存するのである。天文學に於ては、一定の結果を生ずる諸原因は其の數少なく、又變化することも少なく、且つ其の僅かな變化も知られたる法則に従ふて行はれるのであるから、天文學にありては與料は法則自身と同様に確實である。然るに之れに反して、社會の狀態及び進歩に影響を及ぼす事情は無數に存し、且つ常に變動しつゝある。そうして其等の事情の變動は總て原因に従ふて、故に又法則に従ふて行はれるものであるが、しかも其等の原因の數は甚だ多くして、吾人の有限的な計算力を以ては、到底計へ切れない。要するに社會科學

にありては、其の法則は確實であるが、併し夫れが適用さる可き與料は、甚だ不確實であるので、そうして夫れが爲めに將來の豫見は、到底確實に行はれ得ないのである。

併し豫見に對しては甚だ不充充分なる知識も、實際の案内者としては非常に有益であり得る。そうして社會の科學は、若し夫れが吾人をして、與へられたる一定の社會狀態が、如何なる原因によりてあるが如くに形成されたか、如何なる變化をなさんとする傾向を有するか、其の現在の各特徴は他日如何なる結果を生ずるであらうか、又其等の結果の何れもが、如何なる手段によりて豫防され、變更され、或は促進され得るか等を、理解させることが出来るならば、既に高度の完成に達したものと認め得られるであらう。そうして吾人が何れの國或は時代に對しても、其の特殊の諸事情を熟知するならば、其等の諸問題に答へ得るに充分なる一般的諸法則を、眞實に確立し得ることを望むは、決して空想的なる希望ではないと思はれるが、今かゝる一般的法則を確立せんとするのが、即ち社會科學の目的である。

ミルは以上述べし如くに、先づ社會法則の特性を研究して、社會科學の一般的性質及び目的を決定し、夫より社會科學の使用す可き正當なる方法を、確定せんとして居るのであるが、此處に彼は先づ消極的に、其の正當なる方法と云ふは、決して彼が化學的方法或は實驗的方法と稱するものでも、亦幾何學的方法或は抽象的方法と稱するものでもない理由を詳論し、それより積極的

に、其の正當なる方法と云ふは、彼が物理學的方法或は具體的演繹法と稱するもの、及び逆演繹法或は歴史的方法と稱するものであらねばならぬ理由を論證して居る。然るに右の二つの方法は、後に述ぶる處によりて知られる如く、其の性質に於て重要な差異を有するものであるから、かゝる二つの方法が均しく社會科學の正當なる方法であると云ふは、つまり社會科學が根本的に二つの部類に大別されることを意味するものである。要するにミルは社會科學を根本的に、特殊的社會科學と一般的社會科學との二部類に大別し、そうして物理學的方法或は具體的演繹法を以て、特殊的社會科學が其の本質上使用す可き特有の方法、又逆演繹法或は歴史的方法を以て、一般的社會科學が其の本質上使用す可き特有の方法と認めるのである。然るにミルは一般的社會科學とは即ち社會科學である、或は社會學とは即ち一般的社會科學であると見るのであるから、此處に先づ彼の社會學概念を考察せんとするに當つては、吾人は彼が一般的社會科學と云ふは如何なるものにして、又其の特有の方法と認める歴史的方法とは、如何なるものであるかを考究せねばならぬ。

夫れミルの考へる處によれば、社會科學的研究に二種ある。其の一は、社會的諸事情の一定の一般的状态を前提して置いて、新たに與へられたる一原因から如何なる結果が續起するであらうかと云ふ問題を研究するものにして、其の二は其等の一般的諸事情其物を決定する法則は、何で

あるかを研究するものである。此の第二種の研究にありて問題となるのは、社會の一定狀態に於て、與へられたる一原因の結果は、何であるであらうかと云ふ事でなく、社會の諸狀態を夫れ夫れ一般的に產出する諸原因は何であるか、又其等の諸狀態を夫れ夫れ特質附ける現象は何であるかと云ふ事である。そうして此の問題の解決に於て一般的社會科學は成立し、又之れによりて他の一層特殊的なる研究の諸部類が制限され、督制されるのである。

かくて一般的社會科學の範圍を正當に理解し、且つ之を社會科學的研究の從位的諸分科から區別する爲めには、「社會の狀態」と云ふ概念の意味を確定することが必要であるが、要するに社會の狀態とは、つまり總てのより大なる社會的諸事實或は諸現象の同時的狀態を意味する。詳しく云へば其等の社會的諸事實或は諸現象が、其の間に存する自然的相關々係（ナチュラレンス）によりて、必然的に一定の結合をなして居ること、隨ふて又此處に共存の齊一（Uniformities of Co-existence）が存立して居ることを意味するのである。尙ほ此の事は更に、社會の狀態を產出する諸原因間にも亦、共存の齊一の存立することを意味する。かくて社會の狀態を構成する諸現象間に存する共存の齊一は、其等の諸現象が依て以て決定される因果の法則の支則であらねばならぬ。實際に社會の各狀態の諸要素間の相互的相關々係は、社會の一狀態と他狀態との繼續を規定する諸法則から生ずる、一の派生的法則であるのである。是れ社會の各狀態の最近接原因は、直ちに夫れに先行する

社會の狀態であるからである。されば社會學の基本問題は、つまり社會の何れの狀態もが、夫れに續て起り、夫れにどり代る狀態を、依て以て產出する法則を發見することである。そうして此の問題は、科學の對象として取扱はれる社會現象の、總ての正當なる概念中に含まれる一觀念、即ち人間及び社會の進歩性に關する困難な大問題に、吾人を導くのである。

夫れ人間及び社會、或は人類は進歩するものであるか、又は一定の階段を循環するものであるかは、近世に入りてより盛んに論究されて來た問題であるが、今や人類の進歩性は一般的に承認されて居ると思はれる。そうして此の思想に基いて、社會科學に於ける最も勝れたる一考察法即ち歴史的方法が、近來築き上げられたので、今や大陸の最も進歩せる思想家は、此の方法を用ひて歴史の一般的事實を研討し分拆し、以て彼等の所謂進歩の法則なるものを發見せんと努めて居る。是れ大に賀す可き事である。併し其等の思想家が其の進歩の法則なるものを、一の自然法則と考へて居るのは謬見である。夫れは只一の經驗的法則であり得るだけである。是れ人心及び人間社會の諸狀態の繼續は、夫れ自身の獨立なる法則を有し得ないものにして、人間に於ける境遇の作用及び境遇に於ける人間の作用を支配する、心理學的及び性格學的法則に依存せねばならぬからである。人心及び人間社會の諸狀態の繼續の法則は、甚だ確實であるが如くに見えても、夫れは本來一の經驗的法則に過ぎないものにして、決して眞に確實ではあり得ない。そうし

てかゝる經驗的法則の發見を以て、科學の終局の目的と認めることは出来ない。人心及び人間社會の經驗的法則は、夫れが依存せねばならぬ心理學的及び性格學的的法則と結び附け得られ、先天的演繹と歴史的證明との結合によりて、一の科學的法則に化成し得られるまでは、吾人は精々の處甚だ手近な場合を越へては、將來の出來事を夫れに信賴して豫見することは出来ない。

以上述べし如く、歴史から概括されたる何物も、夫れに對する充分なる理由が人性に於て見出されたる後に非らずば、社會法則として認められてはならないが、しかも亦吾人は人性の原理と、人類生存の一般的諸事情との二者から出發して、人類の發達が従はねばならぬ一定の順序を先天的に決定し、夫れより現代に至るまでの歴史の一般的事實を、豫見することが出来るものと考へてはならぬ。人間社會の諸狀態の歴史的連續に於ては、最初の數狀態が相續で生起したる後は、各世代が夫れに先行する世代から受ける影響は益々増大して、他の總ての影響を壓倒してくるので、かくて吾人が今現にあるが如くにあり、又今現になすが如くになして居るのは、結局只甚だ僅かな度合に於てのみ、人類の一般的諸事情の結果（或は吾人の原本的諸性質を通じて作用する諸事情の結果）であるに過ぎずして、大なる度合に於ては人類の今日までの全歴史によりて、吾人に於て產出されたる諸性質の結果であるのである。境遇或は諸事情と人間との動反動の甚だ長き系列にありては、其の相連續する各項は、順次に益々多數の又種々相異なる諸部分から成立

するものであるが故に、かゝる長系列を、單に元素的諸法則から産出されたるものとして、簡単に説明することは到底不可能である。

さはれ若し諸結果の系列が、全體として考察される時にも、尙ほ何等の規律性をも表示しないならば、吾人は一の一般的社會科學を建設することは到底出来ないで、如何に努力することも夫れは無益であるであらう。そうしてかゝる場合には、吾人は固定して居ると考へられたる社會の一状態に於て、其の中に新たに移入されたる一原因が、如何なる結果を生ずるであらうかを確かめんと努力するだけで、満足しなけねばならないであらう。かゝる智識は吾人が日常の政治的生活に於て、比較的な普通な場合に處する爲めには充分であるが、しかし社會の進歩的發達が重要な影響を及ぼす總ての場合には、吾人を誤りに陥らしめ易い。随ふて場合が重要なものであるほど、吾人はかゝる智識に信賴し難くなるのである。然るに人類の自然的差異も亦諸地方の境遇或は諸事情の原始的差異も、共に兩者が夫れ夫れ相合致する處よりは遙かに小なるものであるから、此處に人類及び其の事業の進歩的發達に於て、自から一定の度合の齊一が現はれるのである。そうして此の齊一は又社會の進歩するにつれて、益々増進する傾向を呈して居る。是れ始めには全く自己の性質と境遇とによりてのみ、決定されて居た各人民の進化は、他の諸人民の影響の下に、又其等の人民が影響されて居る境遇の影響の下に、段々に引き入れられてくるからで、

更に其等の影響は文明の進歩するにつれて、益々増大して来るからである。されば歴史は、吾人之を賢明に又注意深く吟味する時は、社會の經驗的法則を呈供するのである。そうして一般的社會學の問題は、つまり先づ其等の經驗的法則をよく確かめ、次にかゝる經驗的法則を人性の最後の一定法則と結び附け、前者は後者の論結として當然期待さる可き派生的法則であることを演繹的に證示することである。

さはれ歴史が派生的法則を呈示した後でも、かゝる法則は諸結果が人性の法則と合致して產出され得たる、繼續或は共存の唯一の秩序であつたことを、先天的に論證するは殆んど不可能であると云ふてもよい程である。吾人は精々の處で、かゝる法則を期待し得る強向な先天的理由のあること、又人間の性質及び彼の地位の諸事情から考へて、如何なる他の秩序も恐らくは生來し得なかつたことを示し得るだけである。否な吾人は屢々夫れさえもなし得ない。吾人は生起せしことは先天的に蓋然的であつたと云ふことすら示し得ないで、只夫れは可能的であつたことを示し得るだけである。併し此の可能的であつたと云ふことを示すこと即ち徵驗(verification)することとは、論結が本來直接演繹法によりて到達し得られたる場合に、之を特殊的經驗によりて徵驗せねばならないと同様に、必要缺く可からざるものである。抑々經驗的法則なるものは、只小數の實例から引き出されたる論結に外ならざるを得ないものである。是れ社會的進歩の高き階段に會て

到達したる國民は甚だ少なく、殊に夫れ自身の獨立なる發達によりて之れに到達したるものは更に少ないからである。されば此等小數の實例の只一二でさえ、不充分にしか知られて居ず、或は不完全にしか其の諸要素に分拆されて居ず、或は不完全にしか其の要素に分拆されて居ないで、隨ふて他の諸實例と充分完全に比較検討されて居ない場合には、正當なる經驗的法則よりは寧ろ誤まれる經驗的法則が立てられ易いと云ふことは、殆んど疑はれ得ないと思はれる。かくて吾人は實際上最も誤まれる多くの概括が、絶へず歴史の進行から引き出されて居るのを見るのである。そうしてかゝる概括を豫防し或は矯正する唯一の途は、常に心理學的及び性格學的法則によりて徵驗することである。

さて上に述べし處によりて知られる如く、社會の經驗的法則には二種ある。一は共存の齊一にして、二は繼續の齊一である (*uniformities of co-existence and uniformities of succession*)。そうして總て科學は此等の齊一の前種或は後種を確かめ又徵驗することを任務とするものであるから、コントは力學や生物學の例に倣ふて、社會現象の共存の齊一を研究するものを社會靜學と稱し、社會現象の繼續の齊一を研究するものを社會動學と稱した。社會靜學は社會的團結に於ける安定の條件を確かめ、社會動學は進歩的法則を確かめるものである。詳しく云へば社會靜學は社會的有機體の諸部分間に存在する合致 (*consensus*) の理論、換言すれば同時的社會現象の相互的動反

動の理論にして、社會動學は進歩的運動の狀態に於て考察されたる社會の理論である。今社會靜學は社會の諸狀態を其の繼續の順序に關係なしに分拆し、又相互に比較することによりて、經驗的法則或は派生的法則を確かめんとするものであるが、社會的狀態の繼續的順序の考察を主眼とする社會動學は、社會的狀態の繼起の次第を觀察し説明せんとするのである。そうして社會動學は、若し各世代の主要なる一般的諸事情の各々が、直ちに先行する世代に於ける夫れ夫れの原因に結び附けられるならば、先づそれで完成したと云ひ得られよう。併し同時的諸現象間には完全なる合致が存立するのであるから、精密に云ふならば、一世代と他の世代との因果的聯結にありては、前世代の一部分が後世代の一部分を產出すると云ふよりは、寧ろ前世代の全體が後世代の全體を產出すると云ふ可きである。されば世代と世代との因果的聯結を確定せんとするに當て、社會的諸狀態が社會の進歩するにつれて、順次に產出される直接法則或は派生的法則を先づ確かめずして、直に人性の法則から右の聯結を引き出さんとするに於ては、社會動學の眞實なる進歩は到底望まれ難い。其等の直接法則或は派生的法則は、實に一般的社會學の中間公理或は中間原理をなすものである。

併し此處に大に注意せねばならぬ點がある。夫れは現今にありても多くの學者は、甚だ容易に歴史を概括して、直ちに彼等の所謂歴史の法則とか進歩の法則とか稱するものを樹立して居るが、

併しかゝる概括、かゝる所謂法則なるものは、其の儘で右に述べたる直接法則或は派生的法則の價值を有するものでないと云ふことである。其等の概括或は所謂法則なるものは、決して中間原理の資格を具有するものでなく、只かゝる原理の確立に導く一證據に過ぎないものである。其等の概括はつまり社會に於て認め得られる一定の一般的傾向、即ち或社會的要素の進歩的増大とか、他の社會的要素の進歩的減弱とか、又は一定要素の一般的性質に於ける漸次的變化とか云ふが如き、一定の一般的傾向を示すだけのものである。そうしてかゝる一般的傾向は、少し注意して歴史を考察すれば、容易に認知し得られるので、例へば社會が進歩するにつれて、精神的性質は益々肉體的諸性質を壓して勢力を強める傾向があるとか、又外部的拘束を受けない社會階級の從業は、始めは主として軍事的或は武士的なものであるが、併し社會が進歩的に益々生産業に熱中してくると、軍事的或は武士的精神は段々に衰へて、産業的精神が勢力を振ふに至る傾向が現はれてくるとか云ふが如き事は、容易に認知され得るのである。今日の學者も尙ほ一般に、上述の如き性質の概括を以て満足して居る様である。併し其等の概括は、人性の元素的法則或は原理からの直接の系論として承認し得られるには、其等の法則或は原理からまだあまりに遠ざかつて居る。されば其等の概括は最も多くの研究者の精神に於ては、只現實なる觀察の限界内に於て適用し得られるだけの經驗的法則の状態に止まつて居るので、吾人は其の眞實なる限界を決定する

何等の手段も、亦是れまで進み來れる變動が、尙は無定限に持續す可き性質のものであるのか、又は早晚停止す可き性質のものであるのか、更には逆轉さる可き性質のものでさねもあるのかを、判定する何等の手段も有しないのである。

さればよりよき經驗的法則を立てる爲めには、吾人は只社會の諸要素の夫れ是れに現はれ、結果の斷片と夫れに對應する原因の斷片との關係しか指示しない様な進歩的變動に、注目するだけで満足して居てはならない。吾人は管に諸要素の夫れ是れの進歩的變動を考へるだけでなく、更に各要素の同時的狀態をも考へて、社會現象の靜學的考察と結合し、かくて其等の諸要素の管に同時的諸狀態間に存するのみならず、更に同時的諸變動間にも存する對應コレポンデンスの法則を、經驗的に定立せねばならぬ。そうして當然ある可きが如くに先天的に徵驗されて、人類及び人事の發達の眞に科學的な派生的法則となるものは、即ち右の對應の法則であるのである。

然るに此の際は非必要なる觀察及び比較の困難なる過程に於て、若し社會人の複合的存在中の或一要素が、社會的運動の第一次的或は基本的能因として、他の一切の諸要素の上に働くと云ふ様な事實が發見されるならば、夫れは明かに吾人の研究を大に助けることになるであらう。是れ其の場合には、吾人は其の一要素の進歩を中心的鎖と見立て、進んで行くことが出来るからである。そうして吾人は只其の中心的鎖の相連續する各環に、他の一切の諸要素の進歩の夫れ夫れ

對應する各環を聯結するだけで、諸事實の繼續を何れの他の單なる經驗的過程によりて得られるよりも遙かによく、其等の諸事實の因果的連結の眞の順序に接近する一種の自然的順序に於て、表示することが出来るであらう。

今歴史の證明及び人性の證明は著しく相合致して、上に述べしが如き一の社會的要素、即ち社會的進行の諸能因中に於て、特に勢力を振ひ、他の總ての能因を左右する程の一の社會的要素の、眞に存在することを指示するのである。そうして夫れは即ち人類の思考的諸能力の狀態である。但し吾人は其の狀態中に、人類が己れ自身及び己れを圍繞する世界に關して、如何様にかして到達せる諸信仰の性質も含ませるのである。

人間の知力或は思考力は、他の社會的能因に比すれば、比較的に弱いものである。しかも夫れに係はらず、思考力は社會的進歩の主要なる決定的原因である。是れ社會的進歩に貢獻する人性の一切の他の諸性向は、夫れ夫れ其の分に應じて仕事を遂成する手段に就ては、知力或は思考力に依存するからである。例へば生活技術に於て見られる改良の最多數は、物質的安樂を増進せんとする慾望を、其の衝動力として遂成されるものである。併し吾人は只外界事物に就て有する吾人の智識に應じてのみ、其等の事物の上に作用し得るのであるから、何れの時代に於ても其の智識の狀態は、其の時代に於て成就し得られる産業的改良の限界となるのである。そうして産業の

進歩は智識の進歩に隨行し、又之れに依存せねばならぬ。同様な事實は藝術の進歩に於てすらも、大體上認められる。尙ほ未開人或は半開人の最強性向は、明かに夫れ自身に於ては、人間を結合する傾向を有するものでなく、寧ろ人間を分離する傾向を有するのであるから、彼等の間に於ける社會的生存は、只其等の強大なる諸性向を陶冶することによりてのみ可能となるのであるが、然るに其の陶冶と云ふは、つまりは彼等を思想の一の共同的體系に服従させることを意味するのである。そうして此の服従の度合が、彼等の社會的結合の度合を測る尺度となるので、共同的思想の性質が其の社會的結合の種類を決定するのである。併し人々が彼等の行動を一定の共同的思想に従ふて規定すると云ふには、先づ其の共同的思想が存立して居らねばならず、又夫れが彼等によりて信仰されて居らねばならない。かくて思考的諸能力の状態、知力によりて承認されたる諸命題の特性は、社會の物質的狀態と同様に、又其の精神的及び社會的釋狀態を本質的に決定するのである。

今人性の法則から演繹されたる上述の結論は、又歴史の一般的事實と全然合致して居るのである。人類の何れの部分の狀態に於ても、歴史的に吾人に知られる總ての大變動は、夫れが外部からの力によりて強制されたのでない場合には、夫れに比例する智識の狀態或は一般的信仰の狀態に於ける變化によりて生起して居る。物質的文明に於ける各大進歩には、常に智識に於ける進歩

が先だつて居る。そうして何れの社會的大變動にありても、夫れが漸次的發達の途に於て成就されて居るか、又は急激なる衝突によりて成就されて居るかを問はず、社會の思想及び考へ方に於ける大變動が、夫れに先立ちて行はれて居るのである。

以上述べし證據から見れば、人類の進行の順序は總ての關係に於て、主として人類の知力的確信に於ける進行の順序、即ち人類の思想の連續的變動の法則に、依存するであらうと論結することは、正當であると云はねばならぬ。併しかゝる法則は實際上果して確實に發見し得られるや否や、夫れは先づ歴史から經驗的法則として決定され、次に人性の原理から先天的に演繹される事によりて確立され得るや否やと云ふ事は、尙ほ問題として残るのである。そうして智識の進歩、及び人類の思想に於ける諸變化は、只長期間に於てのみ、稍々判然たる仕方にて現はれるものであるから、吾人は社會的進歩の連續の甚だ大なる部分をよく吟味するに非らずば、繼起の一般的順序を發見することを望み得ない。されば吾人は過古の時代の全體を、人類の最初の記録された状態から、最近及び現在の世代の重要な現象に至るまで、考察に入れて討究せねばならない。

三 批判的考察の要目

ミルの社會學論の根本思想は、以上述べ來りし處によりてかなり明かに了解されるところだが、

是れより之を批判的に評價せんとするに當つて、余は先づ余の見地から見て、特に批判の項目として重要視するものを舉止して置きたいと思ふが、尙ほ夫れに先だちて便宜上、彼の社會學の大體の輪廓を簡單に示して置く。

さて前節に於て説述せる處によりて學ばれる如く、ミルは先づ社會現象の法則即ち社會法則は、論理學的には本來自然法則であるが、併し夫れが適用される社會現象の特質に制約されて、一定の特徴を有するものなるを明かにして、以て社會科學全體の一般的性質及び目的を論定し、次に社會法則は其の適用の範圍から見て、根本的に特殊的法則と一般的法則とに大別され、又之を發見する爲めに用ゆ可き方法も、夫れ夫れ異なつて居ると云ふ見地からして、社會科學を論理學的に特殊的社會科學と一般的社會科學との二部類に大別し、夫より社會學とは即ち一般的社會科學を意味するもの、つまり一般的社會法則を發見せんとするものと解して、其の特質を究明せんとして居るのである。そうして彼は先づ一般的社會科學としての社會學の對象たる社會の一般的状态或は文明の一般的状态なるものは、一切の科學の對象となるものと同じく、根本的には其存の關係と繼續の關係とに於て存立するものであると云ふ見地からして、先づ一般的社會法則を一般的共存法則或は一般的合致法則と、一般的繼續法則或は一般的進歩法則とに大別し、隨ふて社會學を前者を研究する社會靜學と、後者を研究する社會動學とに區別した。併し社會の一般的

狀態を構成する諸要素の共存或は合致の關係は、結局は夫れに先行する社會の一般的狀態によりて決定されるものであり、更に其の一般的狀態に於ける諸要素の共存關係は、又夫れに先行する社會の一般的狀態によりて決定されるものであり、かくて順次に先行する社會の一般的狀態に遡つて行かねばならないのであるから、社會學の基本問題はつまり社會の一般的諸狀態の繼續の關係即ち進歩の法則を探究することゝなる。かくて歴史的方法是社會學的基本的方法、其の特有の方法となるのである。併しミルは歴史的概括或は歴史からの概括を以て、當時の大陸の多くの學者の考へし如く、直ちに嚴密なる社會學の法則、即ち社會の自然法則と認めるのではなく、夫れは精々の處で經驗的法則に過ぎないものであると考へた。そうしてかゝる經驗的法則を眞實なる法則即ち社會の自然法則に作り上げるには、かゝる經驗的法則を人性の根本法則即ち心理學的及び性格學的法則に結び付け、後者より前者を先天的演繹的に論證せねばならぬと考へた。要するにミルは眞實なる一般的社會法則即ち社會學の自然法則は、歴史からの概括によりて立てられたる經驗的法則を、心理學的及び性格學的法則によりて演繹的に論證することによりて、始めて確立されるものと考へたのである。併し夫れ 同時にミルは、かゝる性質の眞實なる社會學的法則即ち社會の自然法則を確立することは、甚だ困難なるものであることをよく意識し、そうして其の困難なる理由を詳しく論述して居る。かくてミルの見る處によれば、實際上發見されて居る又

發見し得られる一般的社會法則は、一般に社會的聯結の必然性を表示するものでも、亦蓋然性を表示するものでさへもなく、主として可能性を表示するものである。

今右に述べたるミルの社會學論の輪廓に就て、余が余が見地より見て特に重要な批判の項目となさんとするものは、第一に社會法則は本來自然法則である或はある可きものと見る彼の見解、第二に社會學と他の社會科學との關係に關する彼の見解、第三に社會學の法則を根本的に共存の法則と繼續の法則或は進歩の法則とに大別し、殊に進歩の法則を以て社會學の基本的なる法則と見る彼の見解、第四に彼の性格學の概念及び性格學と社會學との關係に關する見解、第五に實際上の一般的社會法則は主として社會的聯結の可能性を表示するものと見る彼の見解。

余は以上列舉せる諸項目に就て、ミルの社會學論を批判的に評價せんとするのであるが、夫れは同時に又今日の自然科學的社會學論を根本的に批判することゝなるのである。是れ今日の自然科學的社會學論の根本思想は、ミルの社會學論に於て確立されて居るからである。併し夫れに就ては、尙はミルの特殊的社會學の概念、及び特殊的社會科學と社會學との關係に關する見解、并に性格學の概念に就て、先づ述べて置かねばならぬ。そうしてミルは特殊的社會科學に就ては、特に經濟學に就て詳しく論じて居るから、余も此處に特に彼の經濟學の概念に就て説述することゝする。又夫れは本雜誌の讀者をして一層興味を感じさせることにもなると思ふ。